

第7回 「泉大津市オリアム随筆賞」

【泉大津市長賞】

花と割烹着

川崎廣進・泉大津市

学校から帰ると「田んぼの草取り済ましたら、帰りに山羊の青草を忘れんとね。母ちゃん今日は配達多くて遅くなるからね」

薄暗い茶の間の食卓に鉛筆で走り書きした母のメモが何時も置いてあった。小柄な体から書くメモは、可愛い文字で子供でも読みやすかった。田植えから稲刈り迄、男の仕事になると頼る者は息子の私しかいなかった。我家は母が食料品の行商を営み、私と妹の三人家族で他に山羊と雌猫一匹ずついた。父は三十九歳で病死した。

女ざかりの母はバイクで四キロ先の商店街で仕入し、帰ってリヤカーに積み替え客に届けるのを生業とした。少ない時はバイクで配達し普段はリヤカーを使い分けていた。最近の交通不便な限界集落での移動店舗と同じである。バイク姿の母もリヤカーを引く母も、年中薄緑色した割烹着に袖を通し、車掌が集金する小銭入れの黒カバンを首から下げポケットに好物のカンロ飴を三、四個いつも入れていた。

ある雪深い大晦日、二人は正月用食品をリヤカーに山積みし配達に出かけた。雪道も昼間は人や車が行き交い順調に配達が進んだが夜から事態が急変した。雪は不気味にも降り止まず、母は下げた黒カバンの口を開け電池と手帳を取り出すと鉛筆舐めて「えくと、この家は油揚げ三枚とレンコン二本、八百円貰って」玄関に入ると板戸の中から紅白歌合戦を観る家族の笑い声が聞こえた。代金を貰うと「あんちゃん、この寒いのにご苦労さんやね、あんやと」優しく思いやり深い声に寒さ冷たさも吹っ飛ば心地良さだった。母は毎日お客からこんな笑顔や会話をしていたら、辛い時でも行商で生きる力に変えていたのだろうか？

一年最後の仕事も終え空荷のリヤカーを引き二人は家路を急いだ。天はか弱き親子に試練を与え、目も開けられないほど荒れ狂い、立ってさえ居られず二人はリヤカーの陰に体を寄せ合って身を隠した。顔を覆った雪はたちまち凍り付き、頬を歪めるとガラスが割れたように欠片になって落ちた。その過酷な自然条件に我慢出来ず凍り付いた軍手を母に投げつけて声を荒げて「どの家に行っても、笑って家族で紅白歌合戦を楽しんで居るのに、何で俺ん家だけが猛吹雪の中メシも食わさんと夜中まで働かすんや」母は無言で割烹着をめくり、中から毛糸の幅広の襟巻を引き抜くと、私の頭から被せ残り雪を払い落として顔も拭いた。毛足の立った柔らかい襟巻に母の温もりと女の甘い匂いがまだ残り、凍り付いた男の怒りを溶かしていった。荒れた雪も小降りに変わり視界が明るく開けたが、道と川と田んぼの境界が分からず母は道先案内役で先を歩いた。私は母の小さな足跡を頼りに妹の待つ家に着くと、玄関の小窓から漏れたオレンジ色の薄灯が積もった雪の表面を照らしていた。居間

のラジオが懐かしい演歌を歌い、囲炉裏の薪に黒ずんだ薬缶のお湯が「随分遅かったね」と言わんばかりに沸き立っていた。

働き者の母は三十年余り住み慣れた田舎に見切りをつけ、四キロ先の町に転居した。アパートの二階に落ち着くと、自転車を買って求め習い事や草花管理等に人生の後半期を楽しんで生きた。駅や商店街も近く、田舎暮らしの頃から見れば家こそ狭いが別天地だったろう。多くの仲間もでき俳句や手芸、童謡、踊りまで楽しんで来た。私が郷里で個展を続けていた頃、母は仲間を連れて「私の息子の絵や、見てやってね」秘書同然に振舞った。

母の人生に大輪の花が咲いたのは転居してからだだった。夫と暮らしたのは僅か十年余り、幼い子供二人と僅かの田畑を耕して生きてきた過去が母を強くした。本格的に市内の草花管理を依頼され、ボランティア仲間達が次々辞めていっても母だけは残っていた。以降依頼範囲も増え駅構内まで管理する様になった。母に会うため駅に立ち寄ると「この子、大阪に住んでいる私の息子や。年寄みたい髭はやして私より老けて見えるけど絵を描いているんや」自慢げに関係ない駅員さんに言う母だった。小さい頃から二人の子供に食卓囲んで言う言葉があった。「トラは死んだら皮残し、人が死んだら名を残せ」まるで薫陶を受けてるような言葉を何度も聞かされた。

何時も元気に趣味とボランティアに明け暮れた母も九十一歳でこの世を去った。入院して僅か四ヶ月で別世界へ急いだ。新聞が好きな母は口癖の様に自慢した。「私しや、眼鏡無しで新聞読めるよ」他界した翌朝病室の枕元に当日の朝刊が封の付いたまま置いてあった。「婆ちゃん、懸命に生き最後はボランティアに明け暮れ、市や駅から何枚も感謝状貰ったじやないか。花婆さんはトラ以上に名を残したよ」帰阪の途、松任駅前の花壇に母の好きな百合の花が初夏の微風に下げた頭を揺らしていた。